「ＣＡＴＹ」の名前は、「ＣＡｍｐｕｓ」と「ｃｉＴＹ」からの造語で、地域と大学の相互理解、交流促進を目的として生まれました。
「地域との共生　社会に学ぶ」を合いことばに、高等教育機関としての教育研究の成果を、地域に発信します。また学生が取材活動を通じて、読む・書く・話すといった能力を開発していくことも意図しています。

News CATY

ニュース　キャティ

２０１３年10月　第67号

発行／國學院大學
北海道短期大学部
滝川市文京町３－１－１
TEL0125-23-4111　FAX0125-23-5590
編集事務局長　平野富康

國學院大學の教授陣が授業

人間開発基礎論を学ぶ

短大部で集中講義　実験交え興味深く

9月17日から20日まで國學院大學の教授による集中講義が行われた。この集中講義は、國學院大學の教授がこの北海道短期大学部で開講する講義だ。國學院大学に編入学するためにはこの集中講義の単位を取得しなければならない。

今回は原英喜教授に人間開発基礎論Ⅱという講義を開講していただいた。原教授は生理学を専門分野としていて、水泳部の顧問をしている。原教授が生理学に興味をもった理由は、自分が水泳をやっていて無駄のない効果的かつ怪我をしない練習をするためだそうだ。そして今でも水泳を教えるときや体の動きについて指導しているときに、とても役にたっていると話していた。

原教授は人間開発にはその人をよく見て、観察をするということに注意して指導をしている。まずは対象となるひとを見る。そして一人一人に合った指導を見つけることが大切。学生ができないことができるようになったとき、生理学を研究していて良かったと感じると話していた。

今回で原教授が滝川に訪れるのは2回目で、短大部がある滝川の印象は自然に囲まれていて、ヨーロッパの雰囲気に似ていると話していた。人間開発基礎論Ⅱという講義は骨や筋肉や神経などの人間の体の仕組みについてで、主に生理学の講義だ。講義はビデオを見て、教科書で確認しながら進めるという流れだった。そのあとに学んだ骨のスケッチをしたり、心電図を測ったり実技的なことも多く行われた講義だった。ただビデオを見る、教科書を読むだけでなく、実験をして具体的に体験することで理解が深められていた。その中でも今まで特に意識することのなかった心臓や脈拍を実際に測り、働きを勉強するという実験はとても興味深く、全員が釘付けになっていた。國學院大學からたくさんの実験道具を持ってきていただいて、専門的な大学の授業というものに触れることができた。人間開発学部に編入学する予定の私たちにとって、学部の講義の様子を知る大変貴重な時間となった。

原教授の講義で各自が興味を持つ分野への意識も高まり、この経験を今後に役立てたい。（幼児・児童教育学科　児童教育コース2年今井遼／1年立澤竜之介）

初めての幼稚園実習を終えて

貴重な時間を過ごす

幼稚園実習は初めての経験ということもあり、期待と不安からのスタートでした。幼稚園では一日に行うことがたくさんあり、流れについていくことで精一杯でしたが、子どもたちに「次はこれをするんだよ」「こうやってやるんだよ」などと教えてもらい、とても心強かったのを覚えています。

私は3歳児クラスで実習をさせて頂きました。3歳児は初めての集団生活の中で、先生やお友達、周りの人などのように関わっていくのかを学んでいく大切な段階にあるので、道具の使い方、お部屋やホールを使う上での約束など、保育者としてどうして必要なのかということを伝えていく大切さを学びました。また、子どもたちがケンカをしたり、何か困っている時などに一人一人の気持ち、願いを受け止め、解決に導くお手伝いをする難しさも知りました。

3週間という短い期間でしたが、先生方の優しいご指導や子どもたちとたくさん遊ぶ中で、様々な経験をしたり、発見があったりと貴重な時間を過ごさせていただきました。これからもこの経験を活かしていきたいと思います。（幼児・児童教育学科　幼児保育コース2年／鈴木里歩）

アイヌ文化交流の集い「ペカンペ祭」

信仰から生まれる一体感

私は今回、第13回目のアイヌ文化交流の集いである「ペカンペ祭」に参加しました。カムイノミの祭儀から始まり、アイヌ古式舞踊とムックリの演奏、最後にはアイヌ料理を皆で昼食として味わうというものでした。

この祭りを通して私が一番に感じたことは、「信じることから生まれる一体感」という共通点です。アイヌ文化とは神という存在をとても身近に、事細かに気遣うものだと感じました。それは最初に行われた祭儀の時にあったお祈りの言葉の丁寧さと長さから分かりました。同じ酒杯をその場に集まった人々で炉を囲んで回し飲みするところからも皆等しく、一年の健康と安全を祈願しつつも一体感を共有するのです。回し飲みの時の作法などは見ていても少し理解に時間がかかりましたが、見様見真似でもその輪の中に居られることに嬉さを感じました。さらに言えば、弱い部分や影を落とすようなところに何かを信じることによって支えられること。それは家族や友人を含めた繋がりを大事にして日々を生きていく力として還元していく人間の強さでもあるとも感じました。

終わってみて、五感をフルに活用してアイヌ文化に触れることが出来ましたし、アイヌ民族は、日本人が忘れてはならない事柄の原点の多くをもっているのではないでしょうか。新しい領域に足を踏み入れるより先に、これまでのことを振り返る時間を意識的に作っていく必要性を実感しました。（総合教養学科2年／木町総一）

修学旅行の引率を想定

2泊3日で宿泊研修

私たち児童教育コースは9月27日～29日に登別・洞爺・小樽方面に宿泊研修を行いました。

この宿泊研修の目的は、小学生の修学旅行を想定し、児童にどのようなことを教えたいのか、どのように引率すればよいのかなどについて、事前に教材研究を行い、それを実践しようというものです。毎年、2年生が教師役で企画をし、1年生が児童役となって来年の参考にするという形式で行われています。

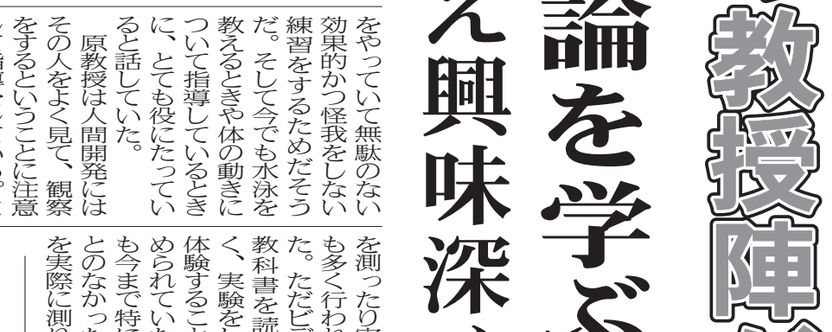
初日は地層とアイヌ文化・鮭の遡上などについて学習しました。私の担当した地層の学習では、恵庭地区の地層を観察し、どこから火山灰が降り積もったのか、それぞれの地層の特徴はどのようなものかを実際に触ったり、資料から分析したりしました。準備は万全で望んだつもりでしたが、内容が高度で理解するのに苦戦した学生が多く見受けられました。後期の授業で各々の意見を参考にし、初等教育研究誌にまとめます。

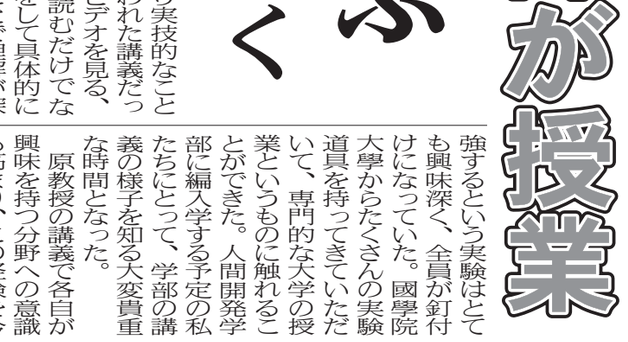
2日目は有珠山の活動による噴火の被害と2011年の東日本大震災で問題となった津波対策について学習しました。特に後者は、今年度の研修から取り入れられた内容で、様々な視点から児童を避難させるにはどの方法が最良であるのか考えました。この学習から、災害が発生したときに迅速果断に避難できるように、学校と地域が常に連携し、共通理解をすることの大切さを改めて感じました。

3日目は小樽の歴史の変遷について金融面・運送面・漁業面の視点から学習しました。

小樽が栄えていった様子や現在の観光地になるには人々の様々な努力があったと学びました。

このほかにも多くの箇所を回り、北海道の自然の雄大さや先人たちの歩みについて学び、『自然と人間の共生』について考える良いきっかけとなりました。また、自分が教師になったときに教材をどう生かし、どのようなことに留意すべきか考える良いきっかけとなりました。この経験を今後に生かしたいと思います。（幼児・児童教育学科　児童教育コース2年／亘理遼）





稲刈り作業を体験して

米作りの大変さ実感

10月1日、稲刈り体験をしました。田植えをしたとき、ほんの20㌢ほどだった稲は農家の方々のおかげで50～60㌢まで立派に成長していました。

今回の稲刈りも農家の方々に指導をしていただきました。稲は6束を刈りそれを1束にまとめ、まとめた稲2束で1セットです。稲1セットを乾燥した何本かの稲で束ねて干します。

農家の方は安定感のある足取りで田んぼの中を移動し、手早く稲を刈り1セットにまとめ、私たちに見本を見せてくれました。農家の方の見本を見た後、実際に私たちも田んぼに入り稲刈りを始めました。田んぼの中はとてもぬかっていて歩くことでさえ一苦労でした。そして稲を刈るにも結構な力が必要なのだと感じました。稲は思ったよりも重く、1セットになるとかなりの重さでした。セットになった稲を束ねるのはとてもむずかしく、ゆるいと干したときにバラバラに崩れてしまいます。そのため、ゆるまないようにきっちりと束ねることにみんな苦戦しました。そんな苦戦している私たちを見て農家の方々は何度も何度も束ね方を教えていただき、私たちの力でできるようにと指導していただきました。

今回の稲刈りを通して、改めてお米を作る大変さを学びました。そして稲の束ね方など昔からの知恵などを感じることのできる体験となりました。実際に私が特別活動としてこのような稲作体験を指導する立場になった際には、お米を作る大変さを学ぶことのできるような指導はもちろん、お米を作る農家の方々の思いや苦労を児童自身が感じられるような指導をしていきたいです。（幼児・児童教育学科　児童教育コース2年／廣瀬莉名）

勉学の成果を今後の人生に生かす

社会人入学をして

人生80年時代を迎え、定年後の長い年月をどのように過すかということは、高齢者にとって大変重要なことであります。

さて私の場合、永年詩吟の勉強を続け、定年後も詩吟愛好者との交流、詩吟界でのさまざまな活動をして今日に至りました。この間に子供達も成長し、数年前には妻が他界して文字どおり一人暮らしとなったのです。70歳を迎えたころ、この先どれだけ生きるかわかりませんが、大学で勉強したいという思いがつのってきたのです。それは若いころからの夢でもありました。

そうした矢先、一昨年の秋のことです。新聞広告で國學院大學北海道短期大学部が滝川市に所在し、同大には国文学科があり、社会人入学制度があるということを知ったのです。

それですぐに入学案内を送っていただき、国文学科を志望する旨、願書を提出しました。国文学科を志望したのは、詩吟の基本的知識を深めたいと思ったからです。そして入試を受け、合格通知をいただいたときには本当に感激しました。このようにワンチャンスで何か導かれるごとく進展していくとは思っていませんでしたので。

入学後は子供達の応援、地元家主さんの御支援をいただいて独身生活を過しながら、各先生方の貴重なお話しを聴講して、卒業を唯一の目標に頑張っております。

来年春には73歳になっておりますが、きっと卒業できるものと確信し、勉学の成果をその後の生活に生かしていこうと、今から楽しみにしているところです。（国文学科2年／對馬英一）

子育てサロン「ありす」

子育て中のお父さん、お母さん、お子さんのための広場です。お子さんを連れて、気軽に遊びに来て下さい。

対象者　おおむね０～４歳未満の子どもとその家族
参加料　１家庭あたり100円（保険料を含む）
申し込み　開催日の前日15:00まで（先着30人）

次回開催日　11月15日(金)
テーマ：学生の出し物

私のふるさと自慢

サザエさんの街

東京都世田谷区桜新町

私の育った東京都世田谷区桜新町は人口3400人ほどの小さな町で、高層ビルが立ち並んでいるといった東京らしいところはないのですが、昭和期にあの有名なマンガ「サザエさん」の作者である長谷川町子さんが住んでいたことと「サザエさん」の舞台そのものであったという事が最大の特徴です。

駅周辺の商店街には、いたる所に「サザエさん」のイラストが施されており、駅前には一時期波平さんの毛が抜かれたことで、何度かニュースにもなった「サザエさん」のキャラクターの銅像が立ち並んでいます。また駅前商店街をしばらく行った所には長谷川町子美術館があり「サザエさん」の原画などが常時展示されており、「サザエさん」の町としての知名度はとても高いものです。

また、ここ桜新町は買い物に便利だとか、レジャー施設があるとかの利便性は無いのですが、交通の便が良く、渋谷や三軒茶屋といった繁華街へ電車に乗れば10分前後で行けるので、大変暮らしやすい町だと思っています。（国文学科1年／白木杜頼）